

ワクチン、ワクチン、ワクチン

赤谷慶子

昨年秋深き頃、舊知の友人インフルエンザ豫防接種受け入院する騒動勃發す。ギランバレ―症候群のごとき症状の入院なりけれど、一週間過ぎ無事退院となりき。醫師よりは今後一切インフルエンザ豫防接種は受けぬやう注意喚起せられたりといふ。過去毎年接種せしものを何故か疑心暗鬼になりたる友人に對し醫師は明確なる原因は分明ならざるも、コロナ感染豫防接種による全體の免疫力低下および加齢に伴ふ體調の減退等々によるにあらざやとの由。

昔の勤務先の同僚連よりの情報及び上記の友人の騒動等により、RNAメッセージャーの四回目接種を吾は躊躇す。然れども感染の急擴大とともに、九十九歳の老母及び四歳年下の九十六歳の叔母に異變ありし折り、彼ら居住する施設に入るを得ぬ可能性あること知れ、やむなく四回目の接種に臨みたり。夕方六時頃に接種受け、翌朝は何事もなく、愛犬との早朝散歩にいそしみ、そろそろ晝餉を作らむやと考へそめしにいみじき悪寒に襲はれ、すはといふ間に九度の熱いでし。解熱劑のカロナール飲み、即刻就眠せり。されど、二匹飼へる猫の内、高齢の腎臓病の仔に補液点滴は必須にて、愛犬といま一匹の若き猫に餌與へ、排泄物の掃除もせざるをえず、やうやうの思ひなりけり。薬飲み十二時間を超えたる頃より熱下がりはじめ、翌朝には漸く七度近くまでになりき。無論朝餉は食せず、薬飲むためのみにヨーグルトを口にし、なほ解熱劑を飲みき。晝前には平熱に戻りたれど、目回るといふ症状いでし。三回目のワクチンはモデルナ選擇しをり、高熱いづるは必定と覺悟せしかど、四回目のファイザーによる九度の發熱は想定せざりき。

六十歳以上の高齢者と呼ばれる國民に、政府は五年毎に肺炎球菌豫防接種案内配布す。吾はこれまでそれを回避し來れど、後期高齢者になるにあたり受くる事を許容するに至る。更には最近带状疱疹のワクチンを醫師に案内せらるる友人ども多し。コロナ禍におきてこの症状多く見られ、それはコロナ感染豫防接種による全體の免疫力低下によるひとつの副反應にはあらずやおしはかられたり。

今流行するコロナ感染種はBA5なれど、ケンタウロスなる新しき變異種登場す。それはBA5の三倍なる強きなりとの由。

多様な感染症増え続けば、多様な予防接種必然となり、かかる有様より早々に脱出し
たく思へど、今後いかなる事態にならむやおほいなる不安地平線に立ちほだかる。

(令和四年七月二十七日受附)